10 月 号　令和２年９月30日発行

荏田小だより

横浜市都筑区荏田南町６９４番地[TEL911－0149]
[http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/eda/]

「塗り絵をかざってくれて嬉しい！」
～子どもたちの自己有用感を高める～

校長　伊藤　智樹

冒頭の言葉は、給食の後片付けが終わった頃に私が聞いた６年生の児童の言葉です。１年生の廊下にいた６年生が掲示してある塗り絵を見ながら「ここに飾ってあるなんて知らなかった。今年は１年生の教室に行く機会が少ないし。私たちが線だけで描いたキャラクターに１年生が色を塗ってできた塗り絵を飾ってくれて嬉しい！嬉しい！」とその場にいた６年生数名とキャラクターを描いたときのエピソードを語り合いながら笑顔で掲示された塗り絵を見ていました。今年は感染症予防対策のため例年に比較すると１年生と６年生の交流機会が少ないのが現状です。この状況下でも６年生は「これはできない」ではなく「これならできる」の考えで徐々に交流機会がもてるようにしています。私たち教職員も模索している中での６年生の言葉は聞いている私も嬉しくなり、元気をもらった気持ちでした。

「自分の活動が他の人のために役立っている」と実感できることは児童だけでなく、私たち大人にとっても重要な事です。
「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、…等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自尊感情」や「自己肯定感」等の語とは異なります。最終的には自己評価であるとしても、他者からの評価やまなざしを強く感じた上でなされるという点がポイントです。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、「クラスで一番足が速いので、クラスの代表に選ばれた。みんなの期待に応えられるよう頑張りたい」という形の自信です。その意味では、「クラスで一番」かどうかは、さほど重要ではなくなっている、とさえ言えます。　　（中略）
平成 13～15 年度文部科学省委嘱研究「児童生徒の社会性を育むための生徒指導プログラムの開発」の研究グループが提言したのが、「異年齢の交流活動の推進」によって「自己有用感」を育むことでした。その知見は、小中学校の学習指導要領にも「異年齢集団による交流」の重要性として盛り込まれています。
「人（他の子供）とかかわりたい」と思う気持ちは、自らの体験によって、獲得されるものです。他の子供と一緒に遊んだりすることを通して、「人とかかわることって楽しい」「人とかかわることって苦痛なことではない」と感じるところから「人とのかかわり」は始まります。それが、「社会性の基礎」を形づくっていくのです。
【出典】　「自尊感情」？ それとも、「自己有用感」？
平成 27 年３月　文部科学省 国立教育政策研究所

自己有用感を子どもたちがもつためには次の３つが大切であると考えます。

① 他者の存在を前提として自分の存在価値を感じること　② 誰かの役に立ったという成就感
③ 誰かに必要とされているという満足感

７月号の学校だよりには「相手を気遣い、周りの人と共に幸せに生きる力、そして他者への思いやり、いたわり、優しさ、感謝の気持ちは、日々の行動の中で育まれ、その根底にあるものは**他者への想像力**である」と述べさせて頂きました。10 月 17 日（土）には半日開催でのスポーツフェスタ（運動会）を実施します。コロナ禍で教育活動が例年通りに実施できない状況下だからこそ私たち教職員は、**「人とのかかわり」を意識しながら「存在価値・成就感・満足感」**を子どもたちが感じられる教育活動を行っていきたいと思います。